資料５ - １

令和５年度　第１回狛江市障害福祉サービス等事業所連絡会　子ども支援部会　R5.6.21

参加者：寺澤（教育支援センター）、福田（ウィング狛江）、寺西（児童発達支援センター）、白石（狛江市役所高齢障がい課）、山本（すてっぷ）、小楠（社会福祉協議会）、沼田（ゆめぽっと）

1.　部会及び自立支援協議会の位置づけの確認について（報告）
※詳細は別紙参照
・事業所連絡会は高齢障がい課：白石さんが所管
・地域自立支援協議会は福祉相談課所管（←現場中心に行う部署）：市が設置する協議会へは沼田が参加。
・自立支援協議会内には子ども部会は出来上がっていない。センターが中心になり各事業所の課題を吸い上げる役割に。
・白石：今後の方針を３～５年計画をして小委員会で決めて行く。部会や事業所連絡会と相談しながら行えると良い。

２．BCP 計画について（研修）
（発表　スタジオそら喜多見　新井佑太さん）

沼田：東日本大震災時、いくら準備をしていても災害は予想を大きく上回った。
・2 階からの車いす移動、毛布で包み床を引っ張る避難訓練を活かし外へ出た
・数日事業所が避難所替わりになり保護者と一緒に泊まる
・日頃の地域との繋がりが大事
・送迎時に被災した場合はどうするか
・だるまストーブ、物資の持ち寄り、職員家族の安否の確認
・安全を確保した後の職員の出勤を明確に
・利用者宅、避難所の定期的な巡回
・ショートステイ、仮設住宅の手配
・ストレスに倒れる職員のケア、他事業所、市役所の応援（ガソリン、物資）

ゆめぽっと：緊急事態宣言時：いつどのように復旧するかを決めるのが難しかった

すてっぷ：山本
・緑野小への避難訓練を行っている。
・靴、火災で机の下に潜る、こだわり等適応行動が難しい子がいる
・緊急性を出さずに避難を誘導するかが重要

児童発達支援センター：寺西
・市の管轄なので、市が訓練を行ってくれる。
・月に１回避難訓練をしている。上靴を履いているのでそのまま近くの中学校まで歩く事をしている。
・避難グッズを持って行く事、おんぶする子を決めている。
・保護者の方と一緒に逃げる。専門職の方も年に１度は練習する
・ホーム等継続的な利用の場と通所の役割の違いを考えた BCP の策定となると思う。

・連絡手段の確保が大事。
　→事業所が複数ある法人ではかなり広範囲で受信できる無線を使用し、訓練と震災時活用されていた。

３．今年度の部会開催日時と内容について（確認）10 月、12 月、1 月
　・昨年度は水曜日メインに行っていたが、金に変更し行う。但し、メンバーの予定も併せて調整して行く。
　・12 月の応急救護訓練への参加人数を１０月の部会時に確認（教材や講師準備の為）
　　→会場をあいとぴあセンターに変更

地域課題
小楠：狛江市地域特別支援教育推進連絡協議会で話題。市内の学校の先生が参加している。課題に挙がっていた事は先生が忙しい。足りない。**地域との繋がり。放デイとの情報共有がしたいが連絡が取れていない。リタリコから情報は貰えるが、他の事業所とも話せればよいと思っている。**良い仕組みができれば良い。

沼田：保育所等訪問支援が６月から再開した。ゆめぽっととしては**授業の中に入っていけるので、先生と直接話し、保護者には学校内での様子を伝える事が出来ている。**訪問支援以外には中々接点を作る事が出来ていない。
他には、胃腸炎等の感染症による欠席者が目立つ。

寺澤：教育支援センター小学校担当している。学校と地域福祉を繋ぐ役割を担っている。学校の現場で放課後等デイサービス等の障害福祉の認知が高まっている。**課題がある子をみつけて、サービス利用に繋げる機会が増えている。共働きの家庭の子の過ごし方（ゲーム、遊び、安全面）について先生からの提案が増えた。**
学校と事業所との連携についてはケース会議の場で共有する事がある。宿題、勉強面でのサポート。学校によって送迎のピックアップの場所迷う場合がある。

福田：学校との連携が出来ていない。調布支援学校はトラサポネットを通して情報を得られる。**狛江市内では、現場レベルでは（学校での情報）得る事ができない。**週１度の利用の子への支援。間に入る人の重要性。話す機会の少なさを感じる。

山本：ポニーの散歩道、避難訓練として緑野小へ行く機会はあるが、学校での様子を知る事は難しい。
進学し、様子が変わった子の原因が後から担任の先生が変わったのでは？という事があった。家から出る事も大変で面談等、必用な時にその子に会えない。良いタイミングの空きがない。不登校状態になった際に放デイからのアプローチは難しい。
→長い目で見て行く必要が有るかもしれない。今は外出が難しい状況かもしれない。こどもの生活がどの方向に向いているのか。外に向いているのであれば、タイミング次第になってくることも多い。チャットやゲーム等含め外に向いている可能性は有る。

寺西：**福祉がやれる事と、学校がやれる事の違いに難しさを感じる**。現在就学相談の真っ只中。なるべく如何に子どもさんが不登校にならないように気を遣っている。子どもさん本人進学先を選べないので保護者が良い環境を選んであげられるように、様々な角度から考え話している。
学校で過ごす時間がメインになるので、今から味方を増やしてあげられるようにアプローチしている。教育支援センターへ繋いでいる。市内事業所の少なさ、計画相談の限界でカバー出来る範囲が限られてしまうが。
　学校の中でのことは、こちらから中々言えない。学校と放デイの役割について話せる場があると良い。

白石：**学校との連携が課題になっているのが分かった。福祉が学校の中にどのように入っていくか。**教育委員会と定期的に話せる機会が有ればよい。お互いにメリットがある。
新井：保護者からの呼びかけがあって初めて動くことになる。学校、放デイ、それぞれの使い分けもある。保護者のニーズ、本人のニーズが中心になる。学校で行う事と、事業所で行うことを整理していくことも必要な時もある。保護者と良く話し合うことが大切。

沼田：保護者に市内外問わず相談支援（計画相談）と繋がるよう勧めて来た。本人・保護者と、学校や他機関の間に入って貰える為。
その後、事業所としては保育所等訪問支援事業をスタートし、療育機関が学校内に行って支援を行う事が出来るという事を保護者に知ってもらった。「是非いってほしい」との声を受け、現在も続けている。
現在関わっている生徒の担任からも、「**放課後等デイサービス事業所、児童発達支援事業所、送迎の有無様々な内容が有る事を初めて知る事が出来た。**今度実際の様子を見学させてほしい」とまで言ってもらえた。こちらで見学会の機会を作り、学校に呼びかけるのも１つの案になるかもしれない。

5.その他
・小楠：狛江市障害福祉サービス等事業所連絡会総会について
・白石：今年始めのアンケートで市内事業所ＢＣＰ５２％未策定との回答だった。東京都から策定支援の連絡も有るので活用してほしい。

別紙

資料５－２

狛江市障害福祉サービス等事業所連絡会（子ども支援部会）と狛江市自立支援協議会の整理について（令和５年６月６日修正）

事業所連絡会役員、ゆめぽっと沼田理事長、狛江市福祉保健部（障がい支援係、相談支援係）に状況の確認後、狛江市子ども発達支援課、児童発達支援センター、ぱるの連絡会で協議し以下の様に整理を行った。

○子ども支援部会は、改めて事業所連絡会の中に位置づける。

○児童発達支援センターを中心とした狛江市内の関係団体のネットワークが構築されるよう、事業所連絡会として協力していく。ネットワークは自立支援協議会内の子ども部会を当てる。（現在未設置）

○児童発達支援センター等は、子ども支援部会に参加し連絡会を通して地域課題を収集する。

○自立支援協議会は、事業所連絡会へ選出依頼を行っているため参加事業所から選出する。但し、国の障害児通所支援に関する検討報告書には自立支援協議会について「市町村は（自立支援）協議会子ども部会を設置し、児童発達支援センターも参画して、地域の課題を把握・分析しながら、地域の支援の質の向上に取り組むことが重要。」と表記があるため、児童発達支援センターの自立支援協議会への参画を所管である福祉相談係に働きかけていく。